

27B-pm02

昭和大学の2附属病院・糖尿病担当診療科が発行した処方箋における糖尿病薬物療法のデータベース解析

○嶋村 弘史¹, 田中 広紀^{3,5}, 向後 麻里^{3,5}, 竹ノ内 敏孝⁴, 中野 泰子⁶, 村山 純一郎^{2,3}, 富田 基郎⁶, 谷山 松雄⁷, 平野 勉⁸ (昭和東大東病院薬,²昭和大病院薬,³昭和大薬病院薬,⁴昭和大,⁵昭和大藤が丘病院薬,⁶昭和大薬,⁷昭和大藤が丘病院内分泌代謝科,⁸昭和大東病院糖尿病・代謝・内分泌内科)

【目的】現代の糖尿病治療の主流は併用療法であるが、どの併用組合せを用いるかは OBM (Opinion-Based Medicine、医師の経験に基づく医療) で判断されるが、改善にはもう一つの OBM (Outcome-Based Medicine) の発展が望まれる。本研究におけるデータベース (DB) 解析は全数解析であることに着目し、EBM 統計学よりも患者単位の医療評価に適しているとの作業仮説を立て患者への服薬指導に処方箋 DB を用いた Outcome-Based Medicine が有用であることを実証したい。

【方法】昭和大学藤が丘病院臨床試験審査委員会および昭和大学医学部・医の倫理委員会が承認した方法で個人情報管理責任者が連結可能匿名化した電子化処方箋を用いた。2病院の糖尿病担当診療科による2010年4月以降の全外来処方箋を各患者の情報を簡単に抽出できる一次情報DBとした。さらに糖尿病患者のヘモグロビンA1c (HbA1c) 情報を用いて処方箋内容との相関関係を解析する。

【結果】目標は糖尿病治療の代表的評価指標である HbA1c 値と処方箋データとの間の相関を見出すことであるが、何が相関するか予想できないため、まず処方箋 DB の素因ごとに解析した。1処方箋あたりの平均薬剤数：4.6、糖尿病薬の処方箋平均薬剤数：2.3、患者平均年齢：61.4、患者女/男比：0.92、薬剤の種類 773、全糖尿病薬の処方数、糖尿病薬の全併用組合せ数 418、各患者の処方箋履歴の経年グラフ化データ (最大受診回数 52 回) などの解析結果を発表する。

【考察】最適な薬物併用療法の選択に関して従来の統計学の還元主義技法による EBM はあまり有用ではないため、患者ごとの治療成績に基づく Outcome-Based Medicine の発展が期待されるが、具体的技法はまだ開発されていない。DB を利用した Outcome-Based Medicine の確立を目指しているが課題が山積している。